

〈赤子のイエス・キリスト奉獻〉

ここでは、イエス・キリストが、人生の初めから神の律法を十分に満たしていったことが記されています。イエス・キリストの職務として、生涯、律法を満たして生きることが必要不可欠でした。罪なき者が死ななければ、贖いの業は成立しません。キリストの職務の中心は十字架の贖いの業であり、これを果たすために罪を犯さないことが必要なのです。

21節で、割礼を受けること、22節から、清めの期間（レビ記12章）を持つことが記されています。男子出産後、四十日間は、母は不浄の期に服し、また、長男の規定（出エジプト13:2, 12）に従っていけにえをささげています。いけにえは一歳の子羊一頭と家鳩の雛か山鳩一羽でしたが、貧しい人は「山鳩一つがいか、家鳩の雛二羽」でよいとされていました（レビ12:68）。ここから、両親が貧しかったということがわかります。

イエス・キリストはご自分で判断できないような赤ちゃんのときも、聖霊が両親に働いて、律法を守らせてくださいました。この部分から、赤子から成長し、少年、青年になっても罪を犯さず、律法を守って生きていったことが暗示されています。イエス・キリストの贖いの業が確かに始まりました。わたしたちが完全に罪赦されるように、イエス・キリストは律法を一つひとつ守っていかれたのでした。

〈神の約束の時の到来〉

さて、両親がエルサレムの神殿についたとき、老シメオンに出会い、彼から祝福を受けました。古代イスラエルの習慣では、幼児を老祭司やラビに抱いてもらって祝福を受けるために神殿に上ることがあったようです。

重要なことは、一つには、ファリサイ派や律法学者たちでなく、聖霊に導かれた老預言者シメオンが語っていることでしょう。世の権力によらず、まさに神に導かれた人によって神がたたえられま

した。

もう一つには、老シメオンの語った言葉です。救い主イエス・キリストを見つけて、「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり、この僕を安らかに去らせてくださいます……」と言います。これは、26節の、「メシアに会うまでは決して死なない」という言葉と関係しています。イエス様がメシア、すなわち救い主であることを証言したものです。また、「異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです」と言って、神をたたえます。救い主到来の約束が成就したことを改めて語っています。約束の成就是、老シメオンに続いて、女預言者アンナの様子からも証しされています。

老シメオンの語ったことは、習慣的な言葉に留まるものではなく、それを大きく超えて偉大なことを語っていたことは、33節の両親の驚きから、知ることができます。

34節では、イエス・キリストの働きについて、「イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりする」、審判者としての働きが語られました。また、「反対を受ける」受難のメシア救い主であることが語られています。皇帝アウグストゥスのように宮廷で守られている者とは異なり、受難の救い主こそ、まことの救い主なのです。このイエス・キリストこそ、神の御前にまことの正しい生き方をなさいました。それゆえに、イエス・キリストを見るときに、わたしたちの「心にある思い」が正しいのかどうなのか、「あらわにされ」ます。

老シメオンの様子は喜びに満ちています。「わたしはこの目であなたの救いを見たからです」（30）。「この目であなたの救いを見た」とは、この後、イエス・キリストを信じて救いに加えられる人々の先駆けでした。まさに、救い主がすでに生まれた「今日」、「今」、ユダヤ人を越えて「異邦人を照らす啓示の光」として、世界中の信仰者は、イエス・キリストにあって神の救いを見ているのです。（酒井啓介）

テキスト ルカによる福音書 2章22～35節
参照カテキズム ハイデルベルク教理問答 問1,36
ウェストミンスター小教理問答 問20
ウェストミンスター信仰告白 第8章4節

〈単元のねらい〉

救済史の中で、この箇所を欠かすことができないのは、ここに約束のメシアを待ち望んでいた一人の人物のことが記されているからです。旧約聖書を通して、真の信仰を養っていたシメオンには、この幼子こそ、「救い」であり、「異邦人を照らす啓示の光」であることを悟ります。さらには、母マリアに、十字架の苦しみを示唆する預言さえ告げます。シメオンという一人の敬虔な人物を記録することを通して、旧約から新約へと通じる太い道筋をルカ福音書は明らかにします。

『もう死んでも良い』ほどの喜び

〈序〉

一人の、おじいさんがいました。神様のことを心から愛していて、いつも、神殿に行って、神様を礼拝していました。名前をシメオンといました。

シメオンさんは、旧約聖書の言葉をよく読んで（まだ新約聖書はありませんから）、その中で神様が約束してくださっているメシア、救い主が現れるのを、いつかいつかと、待ち望んでいました。

実は、神様が、シメオンさんに約束してくださっていました。「メシアに会うまでは、決して死なない。」聖霊なる神様が、そのように知らせてくださっていました。

〈1〉

その日、シメオンさんは、聖霊なる神様から特別な導きを受けて、神殿にやって来ました。「今日は、何か特別なことがあるかもしれない」。そんな予感を、神様からいただいていたようです。

シメオンさんが神殿に入っていくと、赤ちゃんを抱いた若い夫婦が、目に留まりました。

旧約聖書の律法には、その家で最初に生まれた男の子は、神様に献げなければならないと書かれています。実際には、その子の代わりに、献金をささげました。それから、その子を産んだお母さ

んのためにも、献げ物をするように決められていました。

シメオンさんが目を留めた若い夫婦は、こういうふうには律法で神様が命じられた献げ物をするために神殿にやってきた、イエス様のお父さんとお母さんだったのでした。

そして、二人が連れていた赤ちゃんこそ、わたしたちの救い主、イエス様でした。

〈2〉

シメオンさんは、この若い夫婦が連れていた赤ちゃんを腕に抱き上げました。そして、本当に嬉しくなって、神様のことを賛美しました。

「神様、本当に素晴らしいです。もうわたしは、死んでしまってもかまいません。あなたは、約束してくださった通りに、この目であなたの救いを見させてくださったからです。この救いは、世界中の人たちのための救いです。あなたの民であるイスラエルが誇るべきものです」。

シメオンさんは、まだ赤ちゃんだったイエス様を抱いて、そんなふうと言って、神様をほめたたえました。まだ赤ちゃんなのに、この方こそ、神様が与えてくださった救い主だと分かったのです。それで、嬉しくなって、神様を賛美する言葉が、口をついて出てきたのでしょう。もう死んで

しまってもかまわないと言うほどに、喜びに満たされてきました。

イエス様のお父さんとお母さんは、それを聞いて、ビックリしてしまいます。これまでも、マリアさんのところに天使が現れて、イエス様のこと知らされました。そして、今、ここでも、一人のおじいさんがやって来て、イエス様のことを見て「わたしはこの目で神様の救いを見た」と言って、「もう死んでもかまいません」と言うほどに喜んでいきます。

〈3〉

シメオンさんは、さらにマリアさんに言いました。

「この子は、多くの人を倒したり立ち上がらせたりします」。この子を信じない人たちは、倒れることになります。この子を信じる人たちは、新しい命に生きる、立ち上がることになります。けれども、あなたは、信じない人たちのために、「心が刺し貫かれる」ような悲しい経験をします。

イエス様は、やがて十字架にかけられて死なれることになります。マリアさんは、それを目にして、どれほど悲しむことになるでしょうか。シメオンさんは、そのことを伝えようとしたのだと思

います。

〈結〉

けれども、イエス様が十字架で死んでくださることによって、イエス様を信じるわたしたちには「救い」が与えられました。イエス様が三日目に復活してくださることによって、わたしたちも死に勝利して「立ち上がり」（「復活する」という意味で使われる語）、永遠の命に生きることができるようになりました。

イエス様は、シメオンさんが、神様を賛美しながら言った通りに、わたしたちの「救い」を実現してくださいました。

イエス様がこういう救い主だと知るということは、本当に素晴らしいことなのですね。シメオンさんが「もう、死んでしまってもかまいません」と神様に感謝するほどに、素晴らしいことです。神様は、旧約聖書で、ずっと約束してくださっていたことを、ついにイエス様を送ってくださって、実現してくださいました。

ですからわたしたちも、「神様、ありがとうございます。イエス様をありがとうございます」。そんなふうには、イエス様を喜んで歩みたいと思います。 (大西良嗣)

[今週の暗唱聖句]

ルカによる福音書 2章30～32節

わたしはこの目であなたの救いを見たからです。

これは万民のために整えてくださった救いで、

異邦人を照らす啓示の光、

あなたの民イスラエルの誉れです。



〈ねらい〉

先週はクリスマスについて学びました。キリストがこの世に来てくれた意味を今一度思い起こし、その喜びをもって一年の最後の分級とすることができたらと思います。キリストの降誕が、2000年前の出来事というだけでなく、今を生きる子どもたちにとっても大きな出来事であるということを共に分かち合いましょ。

〈展開例〉

- ①先週は、クリスマスについて学びました。今日はその続きです。赤ちゃんイエス様ができてきます。イエス様が生まれた時代、お父さんとお母さんは初めての赤ちゃんが生まれたら神殿に行って、神様に献げ物をしました。本当は子どもを献げ物にするんですけど、子どもを献げる代わりに、鳥や羊を献げます。そういう決まりがあったんですね。神様に献げ物をして神様への信仰をあらわしました。そして、「生まれたばかりの子どもも神様のお守りと祝福の中で過ごせますように！」とお祈りしたんです。
- ②イエス様のお父さんのヨセフさんとお母さんのマリアさんも、赤ちゃんイエス様をつれて神殿に行きました。神殿では、たくさんの方がお祈りをしていました。そうした人々は、この地上に救い主であるお方が来るのを今か今かと待ち望んでいたんです。神様がそのように約束してくださったのを、心から信じていたんです。
- ③神殿の中に、シメオンというおじいさんがいました。長い間神様のために働いてきたおじいさんです。シメオンさんは、聖霊なる神様から「救い主に会うまで死ぬことはありませんよ」といわれたことがありました。その日からシメオンさんは救い主があらわれるのをまだかまだかと待っていたのです。
- ④シメオンさんがいつものように神殿へ行くと、マリアさんとヨセフさんがイエス様のために献げ物をしていました。そのときに、聖霊なる神様がシメオンさんにあの赤ちゃんが救い主ですよ、と教えてくれたのです！ シメオンさんは

思わずマリアさんとヨセフさんのところに行って、イエス様をだっこしました。自分がずーっと会いたかった人に会えた喜びはとっても大きなものでした。

- ⑤みなさんも、冬休みが終わって幼稚園や保育園の友だちと久しぶりに会うときはとってもうれしいと思います。会いたかったお友だちや遠くに住んでいる親戚のお兄ちゃんやお姉ちゃんに会うのってうれしいですね。シメオンさんも、ずーっとずーっと会いたいなぁと思っていたイエス様に会えて、とってもうれしかったんです。
- ⑥シメオンさんはどうしてイエス様に会うことがそんなにうれしかったのでしょうか。シメオンさんにとってイエス様はただの人ではないんです。「救い主」なんです。この地上に、本当の平和と喜びをもたらしてくれる救い主なんです。その救い主がこの世界に来てくださった。ここに、シメオンさんの喜びがあったんです。イスラエルの人たちが長い間ずーっと待っていた救い主、イエス・キリストが今、目の前にいる。それまでの苦しい時代は終わって、神様が人々といつもいてくれる、そのような時代がやってきた。シメオンさんの喜びは、当時の神様を信じる人みんなの喜びでした。
- ⑦今を生きる私たちもシメオンさんと同じように、イエス様がこの世界にきてくださったことを喜びましょ。私たちのために命をささげてくださったイエス様が、聖霊なる神様を通して、いつも一緒にいてくれるのです。今日は、今年最後の分級ですね。この一年間、色々なことがあったと思います。みんなが、いつ、どこにいてもイエス様はいつも一緒にいてくれました。来年も同じです。私たちは、一人のときも決して一人ではなく、イエス様がいつも一緒にいてくれるのです。

〈お祈り〉

今年最後の分級です。今年一年を振り返って、一人ひとり、神様に感謝の祈りをささげましょ。

〈ねらい〉

救い主が与えられることを信じ、待ち望んでいたシメオンの喜びを知る。

〈はじめに〉

クリスマスの教会のいろいろな行事は無事に終わったでしょうか。新しく導かれた子どもはいるでしょうか。久しぶりに日曜学校に出席できた子どもはいるでしょうか。続けてきている子どもたちはクリスマスの喜びで満たされているでしょうか。冬休みを迎え、お正月もありますから、クリスマスはもう終わり、クリスマスツリーも飾りつけもお片づけ、という感覚になりやすいのですが、実はクリスマスという期間はまだ続いているというのが、教会暦です。シメオンの生き様を今年最後のこのクラスでともに味わいましょう。

〈御言葉に聴きましょう〉

- ①おじいさんの名前はなんと言いますか。(25節)
- ②このおじいさんのシメオンさんはどんな人ですか。(25節)
- ③シメオンさんは、神様のお約束をいただきました。どういうお約束でしたか。(26節)

〈展開例〉

馬小屋で生まれたイエス様は、その後、マリアさんとヨセフさんに連れられて、神殿にやってきました。神様のご命令どおり、マリアさんとヨセフさんは、ささげ物を持って、礼拝をするために神殿にやってきました。イエス様は、まだ小さな小さな生まれたての赤ちゃんですね。マリアさんに優しく抱かれていたことでしょう。

神殿で礼拝をしていた時、それを見た、ひとりのおじいさんがいました。そのおじいさんは、すぐに、ピーンと分かったのです。「この赤ちゃんこそ、このお方こそ、あなたがお約束くださった救い主だ！」このおじいさんの名前が、シメオンさんでした。

シメオンさんはなぜ、赤ちゃんを見ただけでイエス様だとわかったのでしょうか。それは、毎日毎日神様を礼拝して、よく聖書も読んで、いつもメシアが現れる日を待ち望みながら、神様に従って生きていたからです。だから、この日、神殿に行ったとき、すぐに「この赤ちゃんが神様が約束されていた救い主だ」ということがわかったのです。ずっと待っていた方を目の前にする、どんな驚きと喜びだったでしょう。シメオンさんはイエス様を抱いて、心から神様を賛美しました。声に出して、「神様ありがとう、神様は素晴らしい、私はこの目であなたの救いを見ました、私はおじいさんですから、もう死んでもかまいません！」と言いました。この大きな喜びは、私たちにも与えられる喜びですね。待ちに待ったイエス様がお生まれになったことを全世界の人と一緒に祝いするクリスマスを先週は過ごしました。そして、今、私たちは、イエスさまを通して、シメオンさんのように神様のお約束の救いが本当になったことを喜ぶことができます。

〈お祈り〉

神様、この一年も今日までお守りくださりありがとうございます。私たちに変わることをない喜びをくださってありがとうございます。この喜びが新しい一年を覆ってくださいますように。アーメン。



〈ねらい〉

クリスマスを祝った喜び・恵みが、生徒たちの生涯にわたるもの—シメオンのように老人となるまで—であることを学ぶ。またイエス様は、御生涯の始めから最後の十字架に至るまで、律法に服し律法を成就してくださり、私たちの救いを勝ち取ってくださったことを学ぶ。

〈展開〉

クリスマスの感動・喜びをふりかえりながら、以下のQ&Aを展開し、聖書の記事を確認しつつ、生徒たちに神様の恵みを考えさせる。

〈ワーク〉

- 先週は多くの教会でクリスマスを祝い、礼拝をささげたことでしょう。舞台はベツレヘムから、
() の () へと移りました。
さてそこにはだれが登場してきますか。(22節、25節)
()、()、()。
- マリアとヨセフはなんのために神殿へ行きましたか。()。
そこでは何がささげられましたか。
() と ()
- シメオンという人が登場します。彼はどのような人でしたか。25節、26節
()、()、()、()、()

- 29節、30節の意味はなんでしょうか。
()
- シメオンは、イエス様がもたらしてくださる救いのことをどのように考えていましたか。(31節、32節)
()、()、()
- 29節から32節のシメオンの言葉は、長いあいだ神様がイスラエルに約束されていたことでした。
しかし救いはイスラエルだけでなく、()、()にも与えられるものでした。
- 4節、35節の意味について話しあってみましょう。

〈答え(参考に)〉

- エルサレム、神殿。イエス様と両親(ヨセフとマリア)
- イエス様を主にささげ、またいけにえをささげるため
イエス様御自身と山鳩一つがいと、家鳩の雛二羽
- 正しい人。信仰があつい人。イスラエルの慰められるのを待ち望む人。聖霊がとどまっていた人
メシアに会うまで死なないとお告げを聖霊から受けていた人
- この世を去り神様のみもとに召されること。
イエス様こそ、神様が約束された救い主であること
- 万民……救い、異邦人……光、あなたの民……誉れ
- 万民、異邦人



〈ねらい〉

シメオンの平安を共有する。

〈展開例〉

Q. 今日は今年最後の日曜日。一年間いろんなことがあったと思う。満足な一年だったか？ それとも物足りない一年だったか？ 勉強や部活、友達や恋愛に夢中になったことを振り返れば「来年も楽しみだなあ」希望をもって一年を終えられる。でもいいことばかりじゃなかっただろう。部活や受験勉強、人間関係での悩み、挫折、苦しみを振り返れば「来年は大丈夫か」不安な思いで一年の終わりを迎えることになる。

①今日登場した老人シメオンもある終わりを目の前にしていた。それは人生の終わり。シメオンは人生の終わりに何を振り返っていたのだろうか？ この時期イスラエルは神様を無視し続けた罰として、国を失いローマ帝国の奴隷となっていた。「神様の民である私達が、本当の神様を知らない人達の言いなりだ。神様から愛され、神様を愛すべき私達がなんたる様だ。この先私達はどうなるんだろう」不安があっただろう。「でも神様は私達をいつか慰めてくださると聖書で約束されている」希望もあったに違いない。「神様、あなたの約束の救い主を私達に与えてください！」救いを待ち望み願い続けたことだろう。不安、希望、願い色々な思いを抱え、シメオンは人生の終わりのときを過ごしていた。

②そんなシメオンがイエス様と出会う。シメオンは「安らかさ」に満たされた。「この先どうなるんだろう」という不安は消え、心は安心で一杯。「神様は私達を救ってくださるだろう」という希望は「神様は私達を救ってくれる！」という確信に。「救い主をください！」という願いは「神様は奴隷となったイスラエルを救うだ

けでなく、世界中のための救い主をイスラエルから生まれさせてくださった！なんと誇らしいことか！」讚美に変えられた。色々な思いで心ざわつく人生の最後にシメオンは安心を与えられた。

③シメオンを安心させた救いとはどんな救いだったのか？ シメオンは救い主をこう語った「イスラエルを倒したり、たち上がらせたりする者」神様を知らないローマ帝国の世界で生きている人々。救い主は彼らに対して「神様から遠のいて倒されるか？ 神様に戻って起き上がるのか？」こうした問いで人を招き、神様のもとに多くの人々を取り戻す方だと言われている。シメオンは信仰の厚い正しい人であった。「今度こそ神様が私達と一緒に生きてくださる。私達を力づけてくださる！ 今度こそ、私達は神様を無視する民から、神様を中心にした民となれる！」人生の終りに与えられたシメオンの安心は、こうした救いを覚えたときに与えられた。この救いへの思いを呼び起こしたのはイエス様である。

④君達の人生の終りは先のこと。でも人生を刻む一年の最後に、不安を安心に変えられて来年に向かいたい。安心はイエス様と触れ合うことで与えられる。イエス様を覚え、神様中心に生きる未来を描くときに与えられる。シメオンの腕の中のイエス様は、今、君の心の中にいてくださる。今日、神様のもとに集められた君達を、神様は来年も奮い立たせてくださる。この救い主に目を向けて今年最後の週を過ごしたい。

〈祈り〉

イエス様、あなたを見つめて一年の終わりを過ごせることに感謝します。イエス様、来年も私を神様のもとに導いてください。アーメン。